開闡（せん）法門

明治三十四年（一九〇一）の暮は鎌倉千手院で年をこされた。院は浄土宗関東第一の由緒ある光明寺の山内にある。

現在の世を救う如来光明を歴史の中におき忘れてきた光明寺は、日新の世におき去りにされて、吉水の流れの末に、心を洗いによりつく人もない。うらがれし萩のしづ枝を這う蟻にまかせて、庭内の路は荒れ、雨漏る廂（ひさし）の半ば落ちし白壁に、にじむしみのみがわびしく目立つ。

幕府当時のつわものどもの夢のあとを、野路の枯草にしのばするみどり黒ずんだ鎌倉山に日は落ちて、夕風寒き由井ヶ浜の波の音は、鎌倉幕府と時を同じゅうして開かれし念仏門の昔を今に響かする。

水天髣髴たる煙波残光に彩（いろど）られ、長汀曲浦（ちょうていきょくほ）に潮よする大平洋の灘風は、やけに現代と西洋とを吹きつける。

後に「歴史」、前に「世界」。

千手院の前の松原つづきの海岸にたたずむ四十三歳の上人に、稲村ヶ崎の宵闇をうすがすれ

行く入り合いの鐘の響はなにをささやき、なにをせまったであろうか。

（一女性に与えられるただのお手紙、用語もまた内容も、十分真意を伺うには不足であろうが、それでも左の一翰にそのへんの消息を示されている。）

「三十一年より三河、尾張、美濃、伊勢の地方また東国にても、例の阿弥陀経を播布に熱心し、少青年のために仏種を下さんとの志より、すでに十有余五万部まで施与して弘通したりき。その後少しく健康を害して、関西に二ヶ年ほど出張を止めて、東国にて伝道に従事したりし。

三十四五年ごろ大に感ずる処ありて、伝道の余暇、浄土教の哲学的方面に研究することにつとめて、大に得るところありたり。

関西の仏教盛なる土地において僧侶衆の請によりて、自己研究の浄土教哲学を講習せること十数ヶ所にて開きたりき。

これを仰げばいよいよ高く、これを鑽ればいよ〳〵かたく、実に広大甚深不可思議なるものは弥陀の光明なり。

古人いわく、弥陀は名をもって衆生を度すと。

元祖大師は十八歳の時より四十三歳にいたるまで、一切聖経は勿論あらゆる宗旨の学問にまで研究に精をつくし、一切仏教中よりえらみ選んで、弥陀の名号を抽(ぬ)きて所帰を定む。選択本願念仏集はこれ宗祖が一切仏教中にえらみぬきて集めたるものなり。その選択の眼目は名号にあり。名は即ち体をあらわす。阿弥陀の名の中に如来の三身四智乃至一切万法ことごとく具備して余りなしと。此芳躅により、阿弥陀の聖名を開きたる弥陀の十二光聖名、その霊徳を詮表する所の洪名のみはただ誇大的に無量無辺の霊名を列ねたるものならむやと。

もっぱら仏力を仰ぎて、念仏三昧門を開き、絶対的無限の霊徳より表顕せる十二光の霊名において、十方一切の世界一切衆生を摂取同化し給う所の真理を知見せられたり。

実に如来の境界は凡夫心力の及ぶ所にあらず、この神秘不測の妙境をうかがわんと欲せばいかなる方便をもってかこれをよくせん。

空拳をもっていかでか千重の鉄関を打破することを得ん。この大鉄関を開くの妙鍵は即ち十二光名によりてその体を発悟するにありと。古来千聖いでて名をもって体を獲得すべき径路を示し給えども、いまだこれを開きて十二光名をもって、あきらかに如来の体相用

をうかがうべきの真理をのこし給わざりしは深意あり。後昆(こうこん)をしてこの霊名によりて広く深く細に微に、如来の聖徳を獲得せよとの聖意ならむ。

世間文化大に発達せり、宗教のみひとり開発せざるの理あらんや。こゝにおいて、如来ひそかにこの愚昧なる小弟子をえらみて、これを開くべき宝鑰を授与し給えるなり、故に選ばれたる小弟子、自ら不敏を顧みず十二光によりて

如来の霊徳をひそかに開くの命を奉ず。自ら感謝おくことを知らざるなり。

宇宙の真理はことごとく十二光によりて示せり。

よって如来光明三昧をもって主義とし奉るなり。

世の闇と罪と悩みとにまどいつゝあるものに、この光明を与えんと欲してやまざるなり。

三世諸仏はこの光明によりて成仏し給えり。

一切の聖賢はこの霊徳によりて得度し給えり。

そののち寝てもさめても光明三昧にて、この光明を総表するものは南無阿弥陀仏にて候

――明治四十三年栃木県家中村渡辺夫人宛――

明治三十四五年より上人の法門に一転機が兆してきた。

これまでは三昧証信の勧化はあったにせよ、一般布教は伝統に準拠し、日課を授け、阿弥陀経を施し、順次往生を勧説された。その間自行は任運に精進して内証を深め、読書の範囲も日新の学術にわたって広く渉猟されていた。

それがたまたまこの前年（明治三十三年・四十二歳）には病を得て、参州で療養かたがた幾ヶ月の閑居をされたのは、衆生済度に寸分の暇なき上人には、恵まれた得難い機会となって、この間に証得の事実を整理詮表して文章に綴られた。つづいて五香でわざわざ棺まで作らしてこれに入り、かくて一切の外縁を屏絶（びょうぜつ）して、超然独不群の三十日に及ぶ別時念仏の深三昧に入られしことは、決して偶然ではなかったろう。この時に心月一層の輝きを増し、いかにせば多年心中証得の如来光明を時機相応の法門に建立して、広く一切衆生を済度せんかとの「五劫思惟」の境界でもあったろう。

名利の念などは微塵もなく、ただ心をささげ身をささげ、誠をつくして仏に仕え、世に仕うるより外に志なき、全分無我の上人は、救われねばならずして救われぬ、今の世の、つみ、やみ、なやみに、慈愛に潤うまなじりを注いで、阿弥陀経だけでも、その後は別として、既にこ

の年までのうちに十数万人に結縁して、「難信の法を説くをもって甚難とする」仏道の経験と成績とに照し、いかにせば如来の赤子なる一切衆生に、如来と親子の再会をとげしめんかと燃えたつ慈悲に胸を焦がされたことであろう。

この明治三十四年（一九〇一）には、世紀末の思想動揺に無理想、無解決を一特徴とした世界が、第二十の世紀を迎えて、唯物思想と実験科学の前に、旧来伝統のものは一度吟味検討した上でなければうけ入れられない、いまだ建設を伴なわざる破壊の風尚が盛んな時で、まして日本は、西洋の五百年を五十年で追いつかねばならぬ明治の輸入物質文明が、やっと三十四五年を今駈け足で蹴飛ばして疾駆している時代であった。自然科学的影響は十分に仏教の上にも反映し、経典批判の科学的研究による経文の成立年代及び地域に対する新しい考察が，大乗非仏説はもちろん、法蔵菩薩を宗教神話とし、極楽を民族伝説とし、経典を作者不明として、ただ文字の穿鑿にのみとどこおって、更にその文字のも一つ奥に輝く三昧実証の大事実の宝珠を探ろうともしない学風が抬頭してきて、その中に育つ若き仏教徒は挙世滔々として信仰を失う時代であった。

いうものは知らず、知るものはいわず、体験ある名師は学界即ち教育界に携らず、若い教界

は一般にその帰趣に迷い、唯物的傾向のみ目立って一世を風靡しておった。

仏教徒なおしかり、世間一般はなおさらである。封建日本をぬけきらぬ殻の中に安定した伝統に活きる、葬られて行く老成国民層は別として、新日本の明日に向って躍進している弾力ある国民層は、形骸化しはなはだしきは営業化し、さらに一層慨わしきは興行化せんとする寺院仏教を、老人婦女子に一任して、西洋物質文明の烈光に眩惑しておった時代であった。それでも一切衆生悉有仏性、現実にあきたらずして、なにかを求めてやまぬ内心のうごめきを感ぜずにはいられない。この劫濁、見濁、煩悩濁、衆生濁、命濁のなかに無上菩提の光を投げかけるものにあっては、いかに難信之法とはいいながら、いたずらに信ぜず行ぜざるを悲しむ前に、信ずるに足り、行ずるに足るものを供給せざることを悲しまねばならないのではなかったか。求めざることに非ずして、むしろ与えざることに嘆くべき筋があるのではないだろうか、二十歳の人に十歳の時の靴をはかせんとしている点はないであろうか。逆に胃の弱い人に堅いものを食べさしてかえって吐かしている点はないであろうか。苦い薬をオブラートに包んで与える親切が欠けている点はないであろうか。

如説修行を本とする真の仏「道」も国民大衆とかけ離れ孤高超然、なかま同士ばかりの仏法となりて、一般民衆の手が届かずば詮がない。

といって自分は信ぜずしてただ古人の信じたる仏法を、屍体解剖として研究するにとどまる仏「学」や、国民生活の第一線にたたざる老人女子の、ただの結縁分斉にとどまる布教や、まれに知識階級に呼びかけ得しものも、成仏の第一義を忘れたる場当りとなって、あたかも紙芝居が子供を集めて盛大を誇るに似たる大衆むきの仏「教」だけでも詮がない。

念仏三昧の第一義諦をまっこうにかざして、その合理的根拠をあきらかに提示し、国民大衆の現実生活の大地にたって、体現したる事実をもって、これを最高涅槃に案内し行く、中心人格の、「人」に実現された「法」の花が咲き、その「人」と「法」に帰依する「人々」に、その人を得ねばならぬ。

低き自然教と、疎き未来教とをたち超えて、しかも現実の生活を充実し、永遠の生命を実現する、円満具足の中道に立つ法門。

一味の仏法が分派した小乗大乗、聖道浄土等、各系統の真理特色を、破るに非ず、ことごとく活かしてこれを整理統一し、さらに一方東西哲学も、セム民族の宗教も、現代科学も総合整

理していわゆる「宇宙の真理をことごとく」統摂する法門。

錆びた伝統の中から念仏の法門を洗錬して、二祖に還元し、元祖に還元し、導師に還元し、大乗も、小乗も、根本の釈尊の成正覚の内容に還元して、さらにその本源の弥陀覚王の真意を開顕したる法門。

頂は高く、涅槃の雲にそびえつつ、一方ふもとは広く、いかなる鈍根の衆生にも手が届き、さらにまたいつの時代にも相応して行けるため、未敷の真理の胚をも含む万国万代にわたって万人をうなづかする弥陀教義。

かかる法門の建立。これは一に如来の霊徳開示にまたねばならぬ。これこそ目ざめることの大事よりも、むしろより一層大事な、目ざめた人の、人を目ざます、普門慈済の道に如来の智慧光明を仰ぐ、悟入思惟の題目でもあったろう。

時代の底に潜んで、つつましやかに、観照の窓を開く上人の一に如来の真意開顕を祈願する、謙虚敬虔な心の写真版に、如来大悲の智願の光が如何なる前代未顕の秘義実義を現像して下さるのであったろうか。

多年証得の如来光明の真相の総合円具の法門は、実地化導と文字言詮の上においおいと表われて、この明治三十四五年より三十七八年にかけてますますハッキリして来た。

光明歎徳

明治三十五年（一九〇二）（四十四歳）一月聖経会（上人の会）印施として、一月二十六日発行浄土教報四七一号付録として、「無量寿尊光明歎徳文及要解」と題する一枚刷のものを頒施された。（昭和八年四月号ミオヤの光本尊の巻にあり。他の印刷の場合と同じく上人の署名はないが、大谷師にもそのご自筆なるを語られた）

十二光明の説相が十分にはまだ整備していないし、通俗なものだけに教理にわたらず、また当時までは「ミオヤ」の尊称も用いられていないが、如来光明歎徳章を無量寿経から選択して「三身」弥陀の「体、相、用」を明かし、「一心に念仏してもっぱら弥陀欣慕の一念に凝神（ぎょうしん）し」「一旦豁然（かつねん）として弥陀の心光に感合」し「現身」に「天然的（うまれつきのままの）精神生活を超越して、弥陀霊化の生活に入る心蘊（こころ）の更生」と「次に依身（からだ）を脱けて正しく報土に入る色蘊（かたち）の更生」を勧説されしもので、諸仏本地の弥陀、三昧の念仏、光明獲得、現身更生の新主張をあざやかにせる、一小紙

片ながら、出版文献となったのは光明法門最初のものである。

しかし文献や教学や、それはわざわざでなく、ただ縁次第、機会次第で偶然発表さるる済度の方便に過ぎないので、期する所はただ一つ自ら通った道に人をも歩まして、ひたすら「弥陀の心光に感合する」あらたまった実生活を完うせしめんとするにある。なやみと、やみと、つみとの不幸から一人一人脱けいでて、光の中に幸福な日ぐらしを永遠に全うし、正しい勤めをなさしめんためである。帰するところは、自他等しく念仏して光明生活に入らんがためである。